第❶日　古典常識

解答

① むつき　きさらぎ　やよい
うづき　さつき　みなづき
ふ(み)づき　はづき　ながつき
かんなづき　しもつき　しわす

② きのえ　きのと　ひのえ　ひのと
つちのえ　つちのと　かのえ　かのと
みずのえ　みずのと

③ ね　うし　とら　う　たつ　み
うま　ひつじ　さる　とり　いぬ　い

④ 子＝二三時～一時　丑＝一時～三時
午＝一一時～一三時　亥＝二一時～二三時

⑤ 卯＝東　午＝南　辰巳＝南東　戌亥＝北西

⑥ 望月＝十五日　立待月＝十七日ごろ
夕月夜＝七日ごろまで　有明月＝二十日以降

⑦ 三代集＝後撰集
四鏡＝増鏡
六歌仙＝在原業平（ありわらのなりひら）　小野小町（おのの こまち）

⑧ ししんでん　さこんのさくら　うこんのたちばな
せいりょうでん　ひのおまし　てんじょうのま

⑨ しんでん　きたのたい　やりみず
わたどの　すのこ

⑩ かんだちめ　てんじょうびと　じげ
さだいじん　くろうどのとう
とうのちゅうじょう
だざいのそち　ずりょう　かみ

⑪ こうごう　ちゅうぐう　にょうご　こうい
みやすんどころ　ないしのかみ　ないしのすけ
みょうぶ

⑫ からぎぬ　も　こうちぎ　かざみ
そくたい　いかん　のうし　かりぎぬ

⑬ こうばい　わかくさ　さわらび
かきつばた　はなたちばな　あおい
しおん　おみなえし　ききょう
かれの　うつろいぎく　つばき

⑭ みす　きちょう　びょうぶ　おしき
わりご　たかつき　たいまつ　しそく

解説

⑬の襲の色目以外は、基本事項ゆえ確実に覚える。

第❷日　係り結び・修辞法

解答

① なむ……ける
・か……いまする
・こそ……をかしけれ

② (いふ)
・(あらむ)

③ 切れ失す

④ 雨が降るといけない。
・待っていたのかと思われたらいやだ。

⑤ 烏なんかが見つけたら大変だ。
・やはり誤りがあったら大変だ

⑥ 垣根こそあるけれど、
・人の姿こそ見えないけれど

⑦ 胸にこたえたのであろうか。
・どういう人が住んでいるのであろうか。

⑧ そんなに物知り顔で言うだろうか、いや言いはしない。
・どうしてさしつかえがあろうか、いやありはしない。

⑨ あしひきの→山・峰
あづさゆみ→はる・ひく・いる
くさまくら→旅・露・結ぶ
しろたへの→衣・袖・紐
ぬばたまの→黒・夜・闇
わかくさの→妻・夫・若
・空欄補充＝ひさかたの
・ちはやぶる

⑩ 駿河なる宇津の山べの→うつつ
・風吹けば沖つ白波→たつ

⑪ ふる＝「降る」と「経る」
・ながめ＝「長雨」と「眺め」
・かれ＝「離れ」と「枯れ」
・まつ＝「待つ」と「松」(「松帆の浦」の一部)

⑫ 鈴＝ふり(振り)・なり・なる(鳴る)
・滝＝流れ　音＝聞こえ

解説

① 「係り結びの法則」を甘く考えてはいけない。空欄補充や正誤問題のキイになることがしばしばあるから、注意を怠らないようにする。

② 省略語の補充は、代表例はきちんと把握しておく。

④・⑤の「**あやぶみ**」、⑥の「**逆接**」は傍線部分訳などにしばしば含まれているので、見落とさないようにする。

修辞法では、⑪**掛詞**が圧倒的に出題頻度が高いので、慣れておくことが必要だ。少し余裕のある人には「百人一首」をお勧めする。「百人一首」にはおよそ三分の一の歌に掛詞が用いられているので一度目を通して、どういうつながりで出て来るものか、その呼吸をつかんでおくとよい。

口語訳

① その人は、顔かたちよりも心ばえがまさっていたのだった。
・このような(田舎の)道にどういう訳でいらっしゃるのか。
・野分(＝秋に吹く激しい風)の次の日こそ、たいそうしみじみとして趣深いものである。

② まことに並たいていの人ではなかったということだ。
・私だけがこのように思うのであろうか。

③ たとえ耳や鼻はちぎれてなくなったとしても、命だけはどうして助からないことがあろうか。

④ 雨が降るといけない。お車は門の下に。
・ただ一度で返事をするのも、(やはり)待っていたのかと思われたらいやだ。

⑤ 〔雀の子を〕烏なんかが見つけたら大変だ。
・それでもやはり誤りがあったら大変だと、あやぶんでいる人がある。

⑥ 垣根こそあるけれど、一つの家のようなので(先方が)望んで預かったのである。
・雑草が幾重にも生い茂っているこの宿は、荒れ果ててもの寂しい感じで、訪れる人の姿こそ見えないけれど、秋だけはやってきたことだ。

⑦ 思いがけない気持ちがして、胸にこたえたのであろうか。
・庭の木立もたいそう趣深く作ってあるのは、どういう人が住んでいるのであろうか。

⑧ りっぱな人は、知っていることだといっても、そんなに物知り顔で言うだろうか(いや言いはしない)。
・鳶がとまっていたって、どうしてさしつかえがあろうか(ありはしない)。

⑨ 日の光がのどかにさす春の日に、どうしてこのように落ち着いた心もなく花が散っているのであろうか。